



発行：新潟市仏教会
責任者：河合正樹

『第9回 市民のための 仏教講座』を終えて

新潟市仏教会 副会長

今 湊 良 信



講師 火坂 雅志 氏

二年に一度の仏教講座が十月十日に県民会館にて開催されました。今回の講師は「天地人」などの作品で知られる新潟市出身の作家、



ユーモアも交え

火坂雅志さんです。新潟駅で講師をお迎えした際、新幹線から長身に長髪で着流し姿の先生が降りてこられたときには、

正直どうしようかと戸惑いましたが、少しお話しすると、気さくでチャイミングなお人柄の方だったので安心しました。

さて、講演の内容ですが、前半は、何となく進学してしまった早稲田大学商学部在学中に、突然歴史小説家になろうと志したこと。

二十数年間に五十冊もの作品を出版したものの、全く売れずに、しばしば「底冷えの感覚」に襲われたこと。かつての「人間の心は金で買える」という風潮に反発して書いた「天地人」が、NHKの大河ドラマの原作に決まった顛末。若い俳優たちや子役との交流などが語られました。

後半では、戦国時代の寺院は、仏教だけでなく数学・天文学・兵法などを学ぶ学問所であったこと。上杉謙信・今川義元・伊達政宗など戦国の武将たちの背後には、かならず北高全祝・太原雪斎ら知識人としての僧侶が存在し、そのアドバイスがなければ武将としての彼らもあり得なかったこと、などが語られました。

最後に、僧侶の仕事とは、人に安心を与えること、悩んでいる人の話を聞き、適切なアドバイスを与えて安心させること。また自分

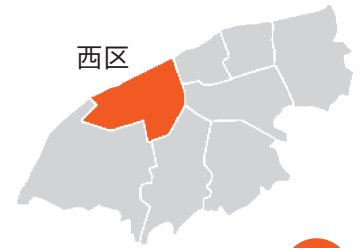
という存在は、時間的には先祖や子孫に支えられ、空間的には周囲の人との関係によって支えられている。自分を支えてくれている存在に感謝しながら生きることが大切で、これを仏教では「生かされている」という、と結論されました。

お見送りの車中で、火坂先生は、ご両親や恩師、実家のある東区本所の方々の前で講演だったので、ことのほか緊張したと話しておられました。先生、どうもありがとうございました。



熱心に聞き入る聴衆

シリーズ 市区八区



西区の記事

「寺婚(寺コン)」開催!

護念寺 細川好円

少子化問題の主な原因は、結婚しない若者が多い、結婚しても子づくりをしないということです。さらに、第二の原因として、若者同士の「出会いの場がない」ということが挙げられます。特に新潟県民は、積極性にかけている。異性に声がかけれられない。心で思っている、行動に移さない。というようなことをあげつつらつてもなんの解決にもならないので、寺が中心となって、「寺でする婚活」つまり「寺婚(寺コン)」を開催することにした。檀信徒へ寺役に回ると、いい年した未婚の男女が結構いる。そういう人たちに声をかけた。

第一回は男子四〇名女子四〇名の大お見合いとなった。年齢制限を設けていなかったため、二〇代の男子が、四〇代女子とお見合いするような滑稽な場面(まさに親子)もあり、人数が多すぎて一人の持ち時間が二分弱となり、見合い相手同士が、名前も顔も覚えられないというお粗末さ。でも、見合い後の大B B Qは、ビンゴなどで盛り上がり、それぞれ気に入った相手の名前を書いてもらい、マッチした二人を寺コン成立にした。その結果二組が誕生。が、記録がお粗末でフォローできなくて、二人の



「良い出会いがありますように…」

その後はわからない。成立カップルに、ホテルディナー券を贈呈。第二回目は、その年の秋、鍋を囲んでの寺コン。年齢制限して、男子一六名女子八名。テーブルに男女合計六名。いろんな鍋の味を満喫し、結果二組が成立。が、その後ポシヤンしたらしい。成立カップルには吉運堂様より、長岡花火栈敷席二席贈呈。

第三回目は、翌年の夏の終わり、年齢制限して男子一三名女子一五名。参加者全員をスタッツに見立て、B B Qの買い出しや、セッティングまでしてもらい、開宴から終了までの間で、ショートデート時間を総当りで一〇分間設け、深くお互いを知ることとなった。成立二組には、主催の坂井輪仏教会より五千円のディナー券を贈呈。

多くのカップルを成立させるためにはアフターケアが必要で、当日マッチしなくても、自分の名前を書いてくれた相手がいるわけだから、主催者側は、「あなたを指名した人がいるけど、会ってみるかいかい？」と、再度お見合いの場をセットすることが大切だ。因みに、会費は男子二千元〜三千元、女子千円〜二千元。会場西区新通護念寺(理由駐車場完備)。第四回目は、来春かな?応募してみる!?写真提供は、吉運堂さんです。



ライトアップで和やかなフリータイム



1対1の真剣タイム

シリーズ 市区八区



秋葉区

秋葉区の記事

秋葉区仏教会の活動

善精寺 桑原俊恵

平成の大合併の後、新潟市仏教会は秋葉区仏教会と名称変更をしましたが、この度、小須戸地区の御寺院方の加入を得て、名実共に秋葉区の仏教会となります。以下は私どもの活動の一端です。

毎年四月に戦没者慰霊祭を兼ねて行われる花祭り（お釈迦様の降誕祭）は当仏教会の最大の行事です。区内寺院の僧侶が平和塔（仏舍利塔）に一堂に会し、読経。お釈迦様の降誕をお祝いし、併せて今のこの社会の礎となられた戦没者を想い、世界の安寧を祈願します。この花祭りは桜の時期と重なり、有り難いことに、年によってはご供物のお饅頭が足りなくなるほど多くの方にお参りをいただきます。仏舍利（仏様のお骨）が納められた塔内でお参りの方々と共に執り行う花祭りは私ども僧侶にとっても特別な機会であります。

また、春秋のお彼岸とお盆の三回、各宗派持ち回りで区内の二老人施設を訪問し、お勤めと法話をさせていただけます。入所している檀家さんから声を掛けていただくこともあります。互いの無事を喜び、短いながらも檀家さんと触れあう場でもあります。このほか、会員有志による四力所の施設訪問が毎月あり、勤行と法話があります。

普段、一般の方々の目には入らないことではありますが、亡き人

への供養として、茶毘に付された方々の焼骨灰供養を毎秋、齋場にて行っています。「齋場を考える市民の会」の委嘱を受け、仏教会が担当しています。寺は「死」に関わる儀式を司るだけでなく、皆様にとって身近な方の「死」を通して、皆様の今の「生」を考えていただく場でありたいと願っておりますが、焼骨灰供養は「死」が日常でもある私どもにとりまして改めて「生」を考える場であります。



昨年10月ワドワ駐日インド大使一行平和塔訪問
(インド大使 前列右から2人目)

最近聞いたちよつといい話です。ある坊守ぼうちりさんの月参りの折り、坊守さん「今日は風邪のため、お経を上手に上げることができずすみません」
檀家さん「お経に上手も下手もありません」
檀家さんとの普段のおつき合いが、生きた聞法の場になっている証と感じました。
(文責 俊恵)

『新潟市に区が八区』あることと、仏教語にある『四苦八苦』をかけて、各区の記事を順番に紹介するコーナーです。

各宗派からの
お知らせ

—仏前結婚式普及プロジェクト—

昭和54年に発足した新潟県曹洞宗青年会は、昨年度をもちまして創立35周年目の節目を迎え、その記念事業として「仏前結婚式普及プロジェクト～結の仏～」を行っております。

世間の人々の多くは寺院・僧侶に「死」の印象を持ち、それが我々を「生きている人々の為の存在」から遠ざける一因となっております。そこでこれから結婚をし、新しい人生を歩む若年層を対象にした取り組みが、先に述べた「死」の印象から「生」の印象への転換を施すものと考え、今事業の発案に至りました。

また結婚式が宗教行事であるという考えからすると、今日の結婚式事情は仏教徒であるはずの新郎・新婦もキリスト教式、神前式、人前式などで挙式を済ませることが多く、式典自体の意義が問われるのが実情であります。そこには「認知されていない」「寺院側に挙行の体制が整っていない」等の仏前結婚式に対して、寺院側と世間の人々との間に隔たりが生じております。

そこで今事業では「仏前結婚式の存在を知ってもらう為の広報活動」「実際に気軽に世間の人々に仏前結婚式を挙げてもらえるための体制を青年会内で整える」ことに重点を置き、より身近な存在として仏前結婚式が受け入れてもらえるべく活動に取り組んで参ります。



期 間／平成26年12月～平成28年3月末まで

対象者／新潟県内で挙式を考えている新郎・新婦

※新潟県曹洞宗青年会の若手僧侶が挙式の準備から挙行まで請け負います
(新郎・新婦の要望に添えるよう面談・打合せを行い準備を進めます)

※費用・挙式会場・その他の問い合わせは下記まで

結の仏 式典執行部 担当／五十嵐 大紀 Tel. 070-2610-6054

「仏前結婚式」は曹洞宗に限らず、各宗派においても積極的に呼びかけ、行われています。
仏教はあなたを応援しています。

《編集後記》

昨今は携帯電話やメールなどを常に確認しないと不安になります。大阪の友人が「人間は不便なことを不便と感じても、便利なことは当たり前と思ってしまう」という揭示伝道されたことを話されました。今では私たちの生活に欠かす事の出来ない携帯電話。ところが「電波の届かない場所か、電源が切られているためかかりません」とアナウンスされる場所では、無用の長物と化してしまします。仏教の教えは「いつでもどこでもだれにでも」わけへだてなく発信されています。もしも届いていないというのなら、教えを聞く耳をふさぐ形で、自らが電源を切られているのかも知れません。何がまことで、何がいつわりなのか、混迷深める時代であるからこそ、仏教の教えに耳を傾けられることを願ってやみません。

Q & A

『お浄めの塩』

- Q 「以前はお通夜やお葬式の時に頂く会葬御礼と一緒に、小袋に入った『お浄めの塩』をよく見かけましたが、最近それを見ないのはなぜでしょうか」
- A 「それは仏教会が葬祭業者にお願いをしたからです。つまり『お清めの塩』がお通夜やお葬式に、どうしても必要な物では無いからです」
- Q 「もう少し詳しく説明してください」
- A 「日本には古くから死を穢れとして嫌う考え方がありました。それでお通夜など死と係わる所から穢れが一緒に付いて来ないようにと、帰宅時に玄関先で塩をふってその穢れを払おうというのです。しかし仏教では決して死を穢れとして避けることはしません」
- Q 「では、どう考えているのですか」
- A 「私たちは『いのち』を持って今を生きていますが、その『いのち』のどれを取ってみても、死から逃れられるものはありません。仏教では『生死一如』といって、生だけではなく死をも含めた丸ごと『いのち』として捉えています。死を穢れとして忌み嫌い避けていたのでは、『いのち』の一面を見ているだけにすぎません。それでは本当に今『いのち』を頂いている喜びや有難さなどは解らないことでしょうか」
- Q 「死を無闇に恐れて目を背けていては、『いのち』の意味も生きる喜びも見失ってしまうというわけですね」
- A 「さらに肝心なことは、私たちは故人を仏さまとして手を合わせているという事実です。大慈大悲の仏さまに穢れなど有る筈も無ければ、塩で清める意味もありません」